HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	韓国語一型アクセントの研究［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	崔, 鉉鎭
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12511号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65371
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Choi_Hyunjin_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　崔　鉉　鎭

学位論文題名
韓国語一型アクセントの研究

本論文は，韓国語一型アクセントに関して、記述言語学的考察を行ったものである。大韓民国の北西に位置する忠清道チョンヤン(青陽)方言、南西の全羅道ナジュ(羅州)方言、北東の江原道コソン(高城)方言、ソウル方言といった４つの方言について、申請者の内省および自らの言語調査から得た記述資料に基づき、分析と考察を行った成果である。

第一章では、研究背景や目的、表記、調査方法など論文構成について述べる。第二章では、先行研究を概観し、「一型アクセント」の概念と再定義を行っている。続く第三章と第四章は、本論として、四つの方言それぞれのアクセント資料からアクセント体系と特性を導くまでのプロセスが示される。第五章では日韓一型アクセントの対照言語学的考察を行う。結論の第六章を含めた全六章の構成となっている。

以下章ごとのより詳細な内容である。

第一章では、本研究の背景として、従来韓国語アクセント研究においてアクセントの対立を持たない（本論文においては一型アクセントと定義されている）方言を対象にした研究は希少であり、従ってその内容の面から明らかでない点が多いことを指摘し、研究の目的について述べたうえで、表記、調査方法、調査地域を含む論文の構成についても示している。

第二章では、アクセントの対立がないという韻律的特性に対する従来の扱いについて、日本語と韓国語における先行研究を網羅して考察したうえで、筆者は韓国語の場合これらを「一型アクセント」として共通に扱えることを提案し、「一型アクセント」の再定義を行ったうえで、韓国語における先行研究をまとめている。

第三章では、全部で四つの節を設け、チョンヤン(青陽)方言、ソウル方言、ナジュ(羅州)方言、コソン(高城)方言に対する記述を行っている。それぞれの方言の名詞や複合名詞を含む文節単位における言い切り形と接続形における音声的データを示しながら、それらを音韻論的に一型アクセントとして解釈するにいたるまでの一連の考察プロセスを詳細に記述し、各節の最後には四つの方言それぞれの特性についてまとめている。特にチョンヤン方言に関しては、アクセント単位認定の必要性を検討したうえで、当該方言におけるアクセント単位認定に関わる要素として、単位の長さと形態素の切れ目が関わることを明らかにしている。

第四章では、前の章において明らかになった各方言の記述・考察を基に、韓国語一型アクセントの特性について述べている。現れる音調型として、文節頭と文節の末尾における特徴から大きく５つのパターンに分けて設けている。１音節目のみ高いＡパターン、２音節目まで高く３音節目以降は低いＢパターン、２音節目だけが高いＣパターン、最後の音節が下降調であるＤパターン、次末音節まで高く最後の音節が低いＥパターンがそれである。さらに、分節音と音調型の関係、現れる音調型の数、接続形にみられる特徴といった３つの観点から、韓国語一型アクセントに現れやすい特性として次のような５つを認めてまとめている。1）言い切り形と接続形の相違が見られる特性、２）２音節において１音節目のみ高い音調型が現れる特性、３）複数の音調型を持つ特性、４）複数の音調型はその出現において分節音が関与する特性、５）B パターンは分節音の影響を受けない特性がそれである。以上の５つの特性との関連性を検討しながら、４つの方言間における共通点と相違点についても明らかにしている。

これらの方言に現れる音調型は、その出現において語頭の分節音と深く関わる。関連する分節音の特徴とそれらを決める音調型に方言差は見られるものの、語頭音節が長母音、強子音、弱子音・母音のいずれであるかということが特定の音調型を決める。

言い切り形に見られる音調型は、分節音と音調型の関係、音調型の数から分析できる。

分節音と音調型の関係を明らかにするためには、分節音が関与しない２つの音調型を除外する必要がある。一つは、単位の長さが２音節の際に共通して現れる１音節目のみ高い音調型である。この音調型は言い切り形の特徴が最も反映されたものとして２音節で現れるのは決まりきった特徴である。もう一つは分節音を問わず現れるＢパターンである。ただし、このＢパターンは、コソン方言を除いた３つの方言だけに現れる特徴である。

音調型の数からみれば、一型アクセントは１種類の音調型のみを有する場合と複数の音調型を有する場合に分けられる。本論文の４つの方言は後者に全て該当する。チョンヤン方言の場合は強子音かつ３音節の場合に限って複数の音調型が現れる。それに対し、ソウル方言、ナジュ方言、コソン方言は分節音と単位の長さによって現れる音調型の数に相違は見られるものの、２音節以上で複数の音調型が現れる。一方、１種類の音調型のみを有するものに関しては、ピョンアン(平安)道方言がそれに該当することが先行研究から確認できる。

第五章では、日韓一型アクセントに関して、対照言語学的考察を行っている。本研究での考察結果と先行研究を基に、両言語における一型アクセントの言語地理学的分布と一型アクセントの特性を対照比較して述べている。先行研究では（曖昧）Ｎ型アクセント地域とされているチョルラ(全羅)道に対して、同地域のナジュ方言が一型アクセントとしての特性を持っていることが明らかになったため、今後再検討の必要があると指摘している。日韓一型アクセントに共通している特性としては、一種類の音調型のみを有するものと複数の音調型を有するものが存在すること、音韻構造(分節音あるいは音節構造)が音調型の決定に関与していること、言い切り形と接続形の相違が見られるものと見られないものが存在することを明らかにしている。

第六章では、結論として全体のまとめと今後の課題を述べ、論文を締めくくっている。